

都道府県別賞一等

私たちを守るもの

宮崎県 宮崎市立櫛中学校 二学年

中村 ティナ

「ガンですね。」

その瞬間、母は涙が溢れ止まらなかったと言う。

『どうして私が……。』

『よりによって何で私が……。』

そんな気持ちで頭の中で駆け巡るなか、医師に言われた。

「大丈夫ですよ、甲状腺ガンは進行が遅いので重く考えないで下さい。」

だが、そのときの母の頭の中は真っ白だった。医師の話など入ってくるはずもない。なぜなら母の父、つまり私の祖父は十二年前にガンで命を落としていた。母にはその苦しいというイメージしかなかったから、現実を受け止められなかったんだと思う。

実を言うと私も甲状腺のガンという病気を全く知らなかった。ネットや本で調べてみると、甲状腺ホルモンが脳の活性化や体温調節などに影響を与え、主に「下痢、体温の上昇、息切れ、落ち着きがなくなる……」などの症状が見られる。とても大事な役割をしている甲状腺にガンができるのだ。

さらに母のガンは、数も多くリンパ節転移も見られたため、九時間にも及ぶ大手術となった。入院、手術、治療から考えたら、医療費も私が想像できないほどであろう。

「ガン保険に入ってた良かった。」

ガンを患った母がそう言うのだから……。

今まで病気やケガと縁遠かった私は生命保険というものを、あまり関係のないものだと思って、深く考えたことはなかったけれど、母のこの経験は改めて生命保険を考えるきっかけとなった。

私は今、十三歳の中学生だ。そんな私にも親は生命保険をかけてくれていた。いつ病気になるか、いつどこでケガをするかもわからない。それを保障してくれるのが保険なんだからと思う。

私たちはその保険に守られているのかもしれない。今は親が入ってくれているこの保険も、いつか私の責任で入るときがきて、いつか私の子供や家族、大切な人を守るときがくるだろう。この作文を通し保険の有難さを知った。

親任せで今まで気づかなかったことや、両親の愛情がつまっていることがわかり、とてもうれしく思った。

## 第54回中学生作文コンクール

生命保険は、これからの私たちが安心して生活していくための保障であり、  
欠かせない大切なもの、私たちを守るものだ。